

チャールズ・ドジスン牧師と聖ペテロ教会

笠 井 勝 子

19世紀のイギリスの教会事情をチャールズ・ドジスン牧師が在任したイギリス北部ヨークシャーのクロフトにある聖ペテロ教会にみる。

1843年にクロフトの聖ペテロ教会に任命を受けたチャールズ・ドジスン牧師にとって、教区児童の教育は、早期に解決をはかるべき課題であった。前任者のジェイムズ・ドールトンは、牧師職の傍ら植物収集を趣味として、教区の仕事は等閑になっていた様子である。赴任する前にクロフトへ立ち寄ったドジスは次のような観察をしている。

改善すべきことが多そうだ。説教は日曜日の午前一度だけで、その結果教会への出席はまったくと言っていいくらい朝の礼拝だけとなっている。教会に属しているこども、いいかえると何か宗教教育を受けているこどもはせいぜい35人。人口は700人、あるいはそれ以上あるというのに。さらに、聖餐式は一年のうちわづか5回しかおこなわれていない。(弟ハッサード・ドジスンへの手紙)

スチュウオート・ドジスン・コリングウッドによれば、当時、聖ペテロ教会の児童のための施設は、つぎのようなものであった。

ドジスン牧師が赴任したときにクロフトにあった唯一の学校というのは、教会の庭にある納屋のようなところでした。

19世紀半ばのイギリスにおける初等教育には、ナショナルスクールとブリティッシュスクールとの二つの系列があった。前者は英国国教会の教義に基づく宗教教育を第一の目的とし、それは牧師の監督と指導のもとにおこなわれる。次に、読み、書き、算数などの有用な学科を教え、さ

らに、女の子には裁縫を教えることを目的とした。同じ建物の中には、男女別の教室があり、それぞれ男性、女性の教師が指導にあたった。運動場も男女それぞれ別に用意されていた。

ブリティッシュスクールの方は、国教会の教義を受け入れない人々が、イギリスの国教を押し付けられることを拒んで、創立したものである。

ナショナル・スクールを開設するには、細かな規定に則って、ナショナルソサエティと枢密院の審査を経て設立が許可される。校舎のための土地は申請する側が用意をし、建物の建築費用の一部に資金援助の提供を受けられる。しかし、それでは十分とはいえず、当然ながら残りの費用は、地元教区民の寄付によって賄うことになる。

1856年1月2日にドジスン牧師の長男の日記には、次のような事柄が記載されている。

ジョン・チェイター氏と食事をした。そのようなことをしたのは、初めてのことである。思っていたよりも楽しい人たちだった。

この日記は、背景にあったドジスン牧師とジョン・チェイターの父サー・ウィリアム・チェイターとの関係を垣間みせている。その関係については、聖ペテロ教会牧師のドジスンとウィリアム・チェイターの間で交わされた書簡に詳しい。二人の交信は、1993年に北ヨークシャー郡の資料保存館から出版された『ウィリアム・チェイター書簡集』の中に入っている。その内の多くは、赴任して1年目の牧師が、教区児童のために牧師の聖職碌である土地の一部を利用して、新しくナショナルスクールを建てようとする計画に関するものであり、その他に両者間でかわされた書簡も入っている。記録を読む前に、先ず、サー・ウィリアム・チェイターを紹介しておこう。

1771年4月29日生まれのウィリアム・チェイターはドジスン牧師より29才年長である。8人兄弟の長子で、ケンブリッジのトリニティ・ホールを出て、法廷弁護士の資格を得た。32才でイザベラ・カーターと結婚

をすると、先祖代々の土地クロフトに屋敷を構え、鉛鉱山の事業で財をなした。やがて、ウィリアム・チェイターはクロフトに湯治場を興し、他所から一時逗留の客があつまるようになった。クロフトに着任する前に一度そこへ立ち寄ったドジスン牧師は、この湯治場について次のような感想を抱いている。

そこ（湯治場）の人気はどんどん下降に向かっている、という話であった。それを聞いても気の毒とは思わない。むしろ、他所から一時的に滞在する人々の出入りは、教区というものに決してよい影響を及ぼさないものだから。

ドジスン牧師のことは、やがてウィリアム・チェイターが起こす摩擦を予測させるものであった。新任の牧師と古くからの地元の勢力者とは、互いに見解の一致を見ることができなかったからである。しかし、老チェイターの書簡集を編纂したM. Y. アシュクロフトの前書きによれば、これは相手がドジスンと限ったことではなかったようだ。

ウィリアム卿は相手が聖職者とみると、たちまち口論をした。これは、珍しいことではなかった。自分の館のあるところではどこでも、そこの教区の牧師とは絶えず言争っていたのである。

この時代において教会では、富裕な人物がその建物の一部を借りて、自分に或いは家族のために専用の席を設けることができた。小作人は領主の意向に逆らうことなどは思いもよらない世の中で、両者の関係はそのまま教会の中へもちこまれた。教会そのものも教区の勢力者の影響下にあり、牧師の権威までも、往々に無視されていたのである。

クロフトに比べれば、ドジスン牧師の前任地のダーズベリは教会録などは5分の1以下という貧しいチェシャーの田舎にあったが、牧師は人々に敬われ、待ち受けられ、頼りにされる存在であった。土地の領主、フランシス・エガトン卿は牧師の良き理解者として協力を惜しまず、或ときは、散歩の途中で、ドジスン牧師は、犯罪の発生が問題視された運河

の水上生活者のために、運河で使用する舟を教会代わりに改造して、そこで礼拝をおこなう計画を語り、今、自分の手元に自由になる百ポンドがあったら、と話すと、エガトン卿は、その舟の仕様を詳しく訊ねてから、ドジスンには内緒で注文をし、作らせて、寄贈したのである。

理解し支援する領主に恵まれていたダーズベリ時代とは異なり、クロフトの聖ペテロ教会の内情は、想像を超えて酷いものであったようだ。これまでほとんど語られてこなかったドジスン牧師とクロフト教会について、以下にみてみよう。

クロフトの聖ペテロ教会の設立は古く、内部にはアングロ・サクソン時代の墓石を表す十字架の石が二つ見られる。その一つは北側の壁に、他の一つは北の身廊の東側の窓に部分が残っている。有名なミルバンク家の席はリギダマツ材で製作されて、赤いベルベットのカーテンが張り巡らされ、中空の高いところに箱形になって、正面に対して横向きで、取り付けられている。高いところから下の席のものたちが献金の財布を開くのを渋らないようにと監視してるような格好をしている、と教区の人々は語っている。こうした特別席の使用料は、教会の収入の一部になっていた。そのため教会内では多くの貴重な場所が、特定の家族に独占されるということがおこなわれていた。20世紀に入って、このようなしきりは徐々に廃止され、クロフトの聖ペテロ教会に作られた見事なミルバンク家の席も1949年には、司教へ返還された。当時の所有者は、ミルバンク家の手を離れて、ウィルスン・トッド一族であった。

ヴィクトリア朝の社会における身分制度は、教会の中でもそのまま守られた。なぜなら、当時は神がこれを定めたものとされていたのだから。次の賛美歌がそのことを象徴している。

富める人は、お城に住み

貧しい人は、ご門の傍に。

神は高きと低きに人を作り

人の身分を、定められた。

教会における地元の勢力者の考えが牧師の方針と対立することもあった。サー・ウィリアム・チェイターとドジスン牧師の場合もそうである。クロフトの教会は、その初めから荘園領主の庇護を受け、彼らの影響力は大きかった。もともとは12世紀の初めに、ブリットニーの伯爵とリッチモンドの領主らが、教会の土地と建物を寄贈したことに始る。彼らは教会と教区の問題に強い影響力を行使してきた。チェイター家との関わりは、15世紀の初頭に遡る。ニューキャッスル出身の富裕な商人で冒険家のクリストファー・チェイターが、エリザベス・クラヴォーと結婚し、クロフトに居を構えて以来続いていた。1246年あるいはそれ以前、既にクロフトとヨークに土地を持ち、教会と地元で強い影響力を持ったクラヴォー家は1400年代の初めには、エリザベス・クラヴォーが唯一人の相続人となってしまった。エリザベスが相続した先祖伝来の土地は、結婚によってクリストファー・チェイターの手に入り、こうしてチェイター家は、クロフトとその周辺に多くの土地を所有することになった。古い教会はいつもそうであろうが、クロフトの教区教会は、こうした過去に遡る柵を負い、先祖代々引き継いで教会のパトロンを名乗る土地の権力者の影響下にあった。彼らが牧師に対して協力的かどうかは、教会運営を大きく左右する。

話を少し先へ移して、1868年にチャールズ・ドジスンが急死したとき、同年その後を継いだ牧師フレデリック・ヘンリー・ローが記録した聖ペテロ教会の状態をみよう。

(教会の建物) 内部も外部もこれ以上はないと言ってよいほどに、酷い状態である。西方の窓は、仕切り柱に対して直角に支える2本の太い柱を当てて、風で内部に吹き落とされないように防いでいるし、教会の屋根は継ぎはぎの補修だらけで、もうこれ以上補修をすることはできないところまできている。座席は、そのほとんどに旗

を敷いてあるために足を乗せるわけにはいかないし、腰掛けるためのベンチの数が少ないことは言うに及ばず。壁を伝って水が流れることは頻繁に起きて、復活祭の日には教会の中に雨が降り込んでいた。

惨澹たる神の家である。前任の牧師であるチャールズ・ドジスンがこの有り様を見のがしていたというのであろうか。そうではないことは、ロー牧師の努力とその結果からわかる。すなわち、フレデリック・ヘンリー・ローは着任と同時にこの状態を改善すべく監督長のリボンの司教であるロバート・ビッカーステスに訴えた。司教は、ローを支持して次の手紙を送った。

この由緒ある教会がここまで崩壊するに任せておかれたということとは もしもこの神の家がその神聖な目的にふさわしいものとなって存在するように、しかるべき方策を講じられることがなければ、遠からず悪い噂となって広まることになりましょう。

これを受けて、ローは教会の改修費用として当時の額で千ポンドの寄付を申し出ている。また、牧師の妻の方は、教会の東側の窓にステンドグラスを入れるための費用を持つと約束している。しかし、教区の中の二大地主ヘンリー・ウィルスン・トッドと、ウィリアム・チェイター卿の後継者であるジョン・チェイターとは、教会の修復は不必要として反対し、同調する他の地主たちの意見を教会役員会と教会委員長も支持した。役員ならびに委員長は、いづれも牧師の意見に反対する地主たちの小作人であった。

クロフトの聖ペテロ教会は、19世紀後半になってやっと改修工事が着工した。フレデリック・ヘンリー・ローの粘り強い努力にも関わらず、彼の在任中には実現せず、リボンの司教への訴えから実に20年を経て、それも裁判に持ち込んでやっと果たすことができたのである。

このような事情をみても、チャールズ・ドジスンが聖ペテロ教会に着

任後、直ぐに着手したクロフトナショナルスクールの建設計画が、多くの試練に遭遇したであろうことは、想像に難くない。以下で彼とウィリアム・チェイター卿の間で交わされた書簡記録からその一端を、みることにしたい。

M. Y. アシュクロフトの編纂による『ウィリアム・チェイター卿（1771-1841）書簡集』の中に入っているウィリアム・チェイターがドジスン牧師と交わした書簡は、1844年6月15日付けが最初のものである。ドジスンが赴任してから1年後に、小学校の建設に関してチェイターは次のような手紙を出した。

貴殿は、懸案中の学校をよもや聖職領耕地に建設しようとしておられるのではあるまいか。その土地を牧師として譲渡できる、と考えるのではあるまいか。女王陛下の議会法に照らしてみれば、いかなる団体も、牧師、教会委員長、並びに貧民のための教区民生委員からなる受託者に、譲渡をすることができる、とある。また、牧師、聖職者らは、法的には、団体としてみなされるもの、と書いてある。

貴殿にお願いするのを失念していましたが、教区の会合は、学校の授業時間が終了後に学校の方で開くようにしてはいかがでしょうか。教会事務室でおこなうとつまらないいざこざが時々持ち上がりますので。

また、是非ともお願いしたいことは、法令の前文に注意を払い、各条項はそれと一致するものとする。私の（寄贈する）窓を鉄で鑄造していただきたく、その下書きを同封します。鉄の方が、鉛よりも安上がりであるためです。鉛の場合は、それを固定するために、別に鉄の枠を作らなければなりませんから。

ドジスン牧師は折り返し、その日の内に返事を出した。

お手紙と同封された窓のスケッチを有難く存じます。スケッチの

方は、よく拝見しました。そのうえで、私は当初の設計案どうりでおこないたいと思います。仕切りにガラスを嵌め込む方が教室の破風にある窓と釣り合いがとれるように思います。特に、ちょうど今、元老院の委員会からの返事を受け取り、提出した設計案が認められたという連絡がありました。従って、今後は如何なる変更を行う場合にも、それにはまた新たな申請のやり直しをする必要が生じ、設計案のみならず、すでに準備した作業計画についても同じことが必要となります。

私は、建物の敷地の譲渡に関して司教と取り決めをおこなう前に、ヴィクトリアc.38議会法令3条、4条の規定を参照してみました。

教区委員会は議論が起きることも予想されるため、場所を学校の建物へ移して開催することが望ましいという、貴方のご提案に賛成します。

この機会を利用してついでながら、教会の古い檜について、貴方はご自分の通路の側にある部分を取り除けると話しておられました件に関して、申し上げたいことがあります。未完成ではありますが、あの檜があることで、教会の中のその周囲に厳かな雰囲気を与えています。したがって、これが失われるようなことになると、甚だ遺憾に思います。

クロフトナショナルスクールはこの時期に枢密院からの建築の許可が出ていたし、また土地は牧師に委ねられた聖職領耕地を提供することで話は進んでいた。そこへウィリアム・チェイターは、窓のデザインの変更を持ち出し、学校の敷地については、譲渡の依託先に異議を唱えたのである。

手紙の終わりに牧師は、この機会を捉えてチェイターが言及した檜の木のパネルについて（それがこういった形態のものであったのか、不明であるが）それを現状のままにしておいて欲しいと伝えた。ナショナル

スクールの問題からは外れるが、檜のパネルの件についてのその後の手紙を見てみたい。チェイターは、翌6月16日に、次のように返事を出している。

貴殿はまったく誤ったことをお聞き及びのようです。クロフト教会の中の古い檜について、私は現在も以前にもあれを除けることなど考えたことはありません。チェスターの司教の故ロー博士は以前クロフト教会を訪問された折りに、あれを引き降ろそうとされました。もしそんなことが起きたら、私は放ってはおかなかったことでしょう。

しかしチェイター卿はそれほど素直な人柄ではなかったらしい。この手紙を受けて、牧師は念のために次のように書き送っている。

檜の問題では、無用な心配をしてしまいました。あのようなことを書きましたのも、実は、先日お訪ねくださった折りに、貴方が口にされたことばを思い違いしたためでした。あの後で、檜を見ていましたら、かなりの部分は明らかに中央通路に立っていて、教会が保有権を有する部分にあることがわかりました。お手紙を書いた時点では、その全部が脇通路にあるものだと思っていたためですが……これに対してチェイターは次のように応えている。

「中央通路に入っていて邪魔にはなっていない」ので、檜は教会に所属するものである、という貴方のご意見に、私はたいへん驚いています。貴方は、何故、檜が教会に所属するとお考えなのか、その理由を、また、誰をさして、何をさして教会と言っておられるのか、お聞かせ願いたい。何故なら、教会は生物ではあらず、これは権利を持ち得ず、設立以来の長い歴史の中で、私はそのような権利主張を誰にも許すつもりはありません。

牧師は、教会に所属するとは建物の一部であるという意味である、と説明した。

このちょうど3ヶ月後の9月16日に、牧師は次の手紙をチェイターに宛てて出すことになる。

クロフト教会主任牧師は、ウィリアム・チェイター卿に対してある問題、個人としての牧師には関心はない問題について、公的な立場で通達をおこないます。これは全面的に信憑性の高い、証拠を踏まえた報告が、主任牧師の元に届いているためで、その内容は、先の金曜日、9月13日に、ウィリアム・チェイター卿は教区教会に立ち入り、予め主任牧師が反対の意向を表明していたにもかかわらず、教会の身廊に立っている彫刻の飾りのある檜の間仕切りの一部を切り落とすことを命令し、自分の手でその行為を補助し、切断した。またこうして切断したものをウィリアム・チェイター卿は教会から運び出すよう指示し、現在それを保有している。

主任牧師は、これらの事実についてリッチモンド教会の大監督に報告をおこなった。

ウィリアム・チェイターは、教会内部の装飾で檜材のパネルを、牧師の警告にも関わらず、切り落とし、運び出す、という理解し難い行為をおこなった張本人であった。私有の場所ではなく、その大部分は教会が保有権を持つ場所に立っていた古い檜のパネルに対するチェイターの粗野で稚拙な行為は、牧師を愕然たらしめたのである。

校舎建築のために牧師が聖職領耕地を提供することに関して、チェイターは次のように考えた。

私の意見を述べますと、ヴィクトリア女王の法律第38章7節の第4と第5によって、(土地の)譲渡は教会牧師、教会役員、貧民のための教区民生委員に対しておこなわれるものである。さもなくば、譲渡は無効となり、将来の牧師が学校の建物を牛小屋に変えて、建設用の寄付は永久使用のためのものではなくなることになる。また、その後出の、昔の規定の下に建てられた学校に関する第8節を参照

されれば、それらの譲渡は教会の牧師、教会役員、民生委員に移される、とあります。

譲渡の対象に関して、牧師は、次のように考えていた。

(土地の) 譲渡を教会牧師、教会役員、貧民のための教区民生委員に対しておこなうことに問題があります。このことに関しては、かなり前に既にお話をしました。一つには、この教区では数の上で、不都合があるからです。しかし、そのことよりも、将来そのメンバーの一部、あるいは牧師を除いたすべての人が異議を唱えることがありうるためです。したがって、司教と大監督ヘッドラムによる一致した意見のもとに、私は、受託者をリボンの司教、リッチモンド大監督、クロフトの牧師、またそれらの継承者とするのが望ましいと考えました。

牧師ドジスはこの手紙の中で、「牧師を除いたすべての人が異議を唱えることがありうる」と書いて、当時の教会の有り様を窺わせている。続く手紙の中で、牧師が提案している土地の受託者については司教と相談したのみならず、このような問題に詳しい弁護士に相談をしたところ、まったく合法的で問題ない、という回答を得た、と述べ、また、これについては、すでにナショナル・ソサエティと元老院の委員会の両方から、認可を得ていることを書き、リボン司教、リッチモンド大監督、クロフト牧師を土地受託者とするに、法律上何の問題もないことを繰り返した。

チェイターは自らの意見が割り込む場のないことを不満として、牧師のやり方は、あくまでも違法であり、合法的に事が運ばない限り、学校建設に向けて約束をした寄付は取り止めると、6月19日の手紙で言い渡した。

もしも、的確な方法で土地の譲渡がなされるのであれば、お約束を果たすべきことは重々承知してはいるが、寄付については、お

断わりしたい。

また、非国教派の教師を任命しない点に関しては、貴殿と私の意図は一致しています。しかし、わずか三人が選任権を持つことには、懸念を抱いています。すなわち、オクスフォードでは昨今ピュージャー派が巾を利かせていますが、それと同じようなことが、ローマカトリック教の台頭についてもありうるということです。選任権を持つものが多ければ、その大部分の人がプロテスタントの教員を任命しないようにする、ということは良識としてとても起こりえないことです。

チェイターは、ドジスンをピュージャー派あるいは、カトリック的思想の持ち主と非難する記事を新聞に投書したのではないか。少なくとも、そのような記事が新聞に出たことは、事実である。その記事というのは、つぎのようなものであった。

<愛国新聞より> ダーリントン、クロフト発。

地元の教会の故D 牧師は、教区の民に対しては心優しい、有徳の人物であった。彼は古い教義を信奉する牧師で、ピュージャー派、あるいはその他の派を喧伝するようなことをせず、小さな村の中に反対意見のものが少数あっても、彼らと友好的関係を維持していた。彼の後継者は、これとは全く異なって、過激な聖職者であり、自分の近辺に異なる意見が現れると見るや、如何なる形のものでもこれを踏みにじろうとする。先週の日曜日のこと、珍しい光景が出現した。S氏という近隣教区の聖職者が説教をおこなっていた。この若い人物は、ニューマン派の有望な使徒と言われている。もっとも厳しい弾劾のことだが、「教会」の外部にいるものたちに対して向けられ、あたかも彼らの救済は疑わしいということを明言しているようであった。それを聞いて、近隣からやってきた極めて立派な紳士はたまらずに立ち上がり、帽子を掴んで外へ出て行った。すぐさま、10数

名のものがそれに従った。その中に、北グラム州選出元国会議員ウィリアム・チェイター卿もいた。彼は、出て行きながら、身廊で「ローマカトリックだ、ローマカトリックだ、徹底的にローマカトリックだ」と叫んでいた。この立派な老紳士は、村の土地の主要な所有者であり、上記のようなことがあってからは、異論を唱えるものに広い場所を買い取るようにと申し出ている。

すでに、リバプールの諸聖人教会は、教会の祈りの場所の一部をローマカトリックの礼拝を目的として、3000ポンドで売却されているのである。

チェイターはこの新聞の切り抜きをリポンの司教に送付して、自分は、ピュージー派あるいはローマカトリックを聖職者が信奉することに反対するものではない。ただそのような牧師は、正直にローマカトリックに転向すべきである。このような平信徒の声に耳を貸してもらえないような教会は、大きな墮落を招くであろう、と書いた。

リポンの司教トマス・ロングリーはこれに対して次のように回答をしている。

残念ながら、貴方の書簡の内容は、私の職務上からもまた私の心情からも、ご要望に応えることはできません....ドジスン氏について、私は20年以上にわたって親しく知っております。すでに、彼がダーズベリで17年の間、教区牧師として勤めている間に、聖職者としての彼の仕事ぶりをよく見聞してきました。されにまた、これまで8年に亘って、私のところで試問司祭をしてもらっていることから、その間に、神学上の彼の見解についてはさらに詳しく知る機会を得ています。したがって、私は自信をもって、ドジスン牧師は英国国教会の教義の伝統に忠実なものであること、また、ローマの犯した誤謬については妥協なく反対するものであることを、明言することができます。

司教は、こうしたチェイターの動きを案じてか、この手紙を出すのと同時に教会役員たちへ宛てても、牧師を支持するという同じ内容の手紙を送った。1857年にカンタベリの大司教となってリポンを去るときまで、トマス・ロングリーはドジスン牧師のよき理解者、後ろ楯であった。

1844年10月21日、クロフトナショナルスクール建設はロングリーの手で定礎式が行われた。ロングリーはドジスンより6才年長で、オクスフォードのクライスト・チャーチ学寮で学生時代に会って以来の友である。ふたりは宗教に対して合い通じる考え方を抱き、互いに尊敬しあっていた。1836年にロングリーは当時の首相メルボーンによって、リポンの司教に任命された。ロングリーはすぐさまドジスンを自分のもとで試問牧師に任命した。そして、リボンミンスターにおけるロングリーの司教叙任式において、説教をしたのは司教ではなく、ドジスン牧師であった。このこと一つをとってみても、ロングリーの信頼の篤さを推しはかるができよう。ドジスンはこの時、新約聖書マタイによる福音書第25章24-25節を取り上げている。

1845年3月にリッチモンドの法律事務を扱う弁護士フィールディングのところから、仕事上のことで一人の人物がクロフトに派遣されてきた。目的はクロフトの町の土地の収入から支払われる年間地代の課税割り当てを調べることであった。彼は、牧師に対してその調査の必要性を示し、条例に基づいて、牧師が彼に課税割り当て台帳を見ることを許可すべきことを了承させた。ところが、台帳は常に法的に保管されておかれるべき場所から持ちだされており、監督者としての牧師は非常に困惑した。台帳は、チェイターが勝手に持ち出していたのである。

....本日、午後、改めて調査に出向いてもらうことにしました。

そのときには、関連書類は牧師館にあるようにしておく、との約束をしました。教区関係のものを保管する大櫃および書類等は教会委

員長との合意のもとに、牧師館に置いてあります。したがって、ウィリアム・チェイター卿は書状の回答を添えて、使いの者に課税割り当て台帳を持たせて下さるように、お願いします。

もしも派遣された調査官が、本日午後訪れて、課税割り当て台帳を見たうえで、妥当と判断したものはどれでも抜き出してもって行くことになりました。

その後、チェイターは教会へ納める十分の一税を主管する役人に対して、用事の済んだ課税割り当て台帳を自分のところへ返還するように求めている。彼は、その理由としてクロフトでは、自分がもっとも大きな地主であり、他の地主も自分のすることに異議のないことを表明している、と主張した。こうした我が物顔の振舞いに対して、断固とした態度を示す牧師は、教会の中で孤立、孤軍無援の存在になっていたのである。

ナショナルスクールのための用地の受託者についてチェイターから異議を申し立てられた牧師は、元老院に宛てて再度問合わせをした。その結果、得られた回答は牧師の提案する、リボンの司教、リッチモンドの大監督、クロフトの主任牧師、および彼らの後継者、を受託者とする事になんら問題を認められなかった。その回答をチェイターの元へ送ると、手紙を添えて牧師は自分の考えを再び繰り返した。即ち、もしも法律がそれを必要とするものであれば、チェイターが主張する人々を加えることには議論の余地はないとしたうえで、チェイターが主張する民生委員は教会とはなんら関係のない立場であることを理由に、受託者とする事を拒否したのである。また、教会役員についても彼らを単独に扱う場合は問題なしとするが、彼らと民生委員とを同一に取り扱うという条件は容れられない、と断わった。

こうした見解の相違は相違として、ドジスン牧師はチェイターに対して、個人としてはなんらわだかまりを抱かず、お互いの友好関係は損なわれることがない、と伝え、学校の経営者に関する問題について話し合

いをしたい、と伝えた。ドジスンが出した手紙の20日後、7月24日には、さらにナショナル・ソサエティからの回答が届いた。土地の受託者の問題を含めて提出した計画はすべてそのままで認可された。また、建築費用に対する援助として50ポンド、最終的にはさらに上乗せした額の補助をおこなう、という通知であった。

ナショナル・ソサエティの決定について知らせを受けたチェイターは、牧師に対して、その件についてはまったく触れず、檣のパネルの問題を持ち出した。チェイターは、教会内の自分の席を囲む手すりについて、牧師が取り立てて議論をするのは、如何なる権威によるものかを示すべし、と求めた。チェイターはさらに続けて、

....牧師としての貴方には教会という団体の中でいかなる特別な権限もない、したがって、手すりが身廊の外に立っているかどうかは、問題ではない。このようなことに注意を向ける前に、教会法を読んで、それでも納得できず問題の解決とならなければ、裁判に訴えることがよいでしょう。思うに、牧師たるものには、懸案の問題に関して教区民との言争いはさけるのが、ふさわしいことと思います。

会って話をするよりも、書面をもつての連絡がよいと思います。その方が、誤解になりにくく、私としては直ぐに問題を解決することができるからです。

チェイターは、ナショナルスクールに関する牧師の報告に対しては何もふれずに、ひと月以上も前の牧師の手紙を持ち出してドジスンを非難した。「牧師たるものは、教区民との言争いはすべきでない」というチェイターの言に、ドジスは次のように返事をしている。

懸案の問題で、いや如何なる問題であれ、牧師が教区民と争うことは、牧師としてふさわしいことではない、という点でまったく貴方のお考えと同じです。20年近い私の司牧生活において、私はこれまで教区の誰一人とも争ったことはなく、またこれからもそのよう

なことは決してしません。

チャールズ・ドジスン牧師の長男は、クロフトナショナルスクールの建設計画が進められていた年、1844年の8月1日に初めて学校へ上がった。リッチモンドスクールに入学したとき、彼はすでに12才になっていた。経済的な事情から、彼の初等教育は両親の手によっておこなわれていたが、入学当初から、数学と宗教に特に秀でていた。ラグビースクールからオクスフォード大学のクライスト・チャーチを経て、母校にとどまり、数学講師になったチャールズ・ラトウィッジ・ドジスは、規則の定めるとうりに聖職資格を取得した。しかし、幾段階もある英国国教会の聖職資格試験の中で、彼は第一段階の資格取得を済ませると先へ進むことはしていない。その理由が何かは、推測の域を出ない。彼の吃音癖を挙げる説もある。また、芝居を好む性癖を挙げる説もある。ほんとうのところはわかっていない。クロフトにおける教会の有り様を子ども心に見るにつけて、教会の司牧生活が魅力的なものと映らなかったことは、推測できる。彼の中に見られる柔軟な魂はこどもの心に共感をし、彼の中の論理的で堅固な精神は、現実を笑うノンセンスの世界を創造した。

その論理的思考とノンセンスを育てる過程で、父チャールズ・ドジスン牧師の影響を見落とすことはできない。

参考書誌

Papers of Sir William Chaytor, edited by M.Y.Ashcroft, North Yorkshire County Record Office. 1993.

Lewis Carroll's Diaries, The Private Journals of Charles Lutwidge Dodgson, edited by Edward Wakeling. 1994.

Lewis Carroll : A Biography, by Anne Clark Amor, Dent. 1979.

- St. Peter's Church Croft-On-Tees*, Sue Chaytor, Croft P.C.C., 1989.
- The Life and Letters of Lewis Carroll*, Stuart Dodgson Collingwood, Fisher Unwin, 1898.
- A Short Account of the First Establishment of the Croft National School* in the Year 1845, The Revd. Charles Dodgson Rector of Croft, Darlington, Coates and Farmer, 1856.
- The Lives of Three Bishops*, Revd. Charles Bullock, Home Words Publishing Office, 1889.
- A Record of the courtst affair in the Consistory Court of the Diocese of Ripon*, dated 8 August, 1871.
- Diaries of Lewis Carroll*, Roger Lancelyn Green, edl, vol. II, Greenwood Press Publishers, 1954.
- Mr Dodgson and Sir William Chaytor*, Katsuko Kasai, Lewis Carroll Studies 1999.